

現地理解活動を取り入れた社会科学習の実践

前フランクフルト日本人国際学校 教諭
静岡県浜松市立西小学校 教諭 谷 津 素

キーワード：現地理解教育、社会科指導、地域素材の開発

1. はじめに

指導要領解説においては、社会科の学習内容について「自分たちの住んでいる地域の社会生活を総合的に理解できるようにするとともに、地域社会の一員としての自覚をもち、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする」¹と示されているように、地域との関わりが重要視されている。

本校に学ぶ子どもたちは、ドイツ・フランクフルト市及びその近郊に在住し、成長の一時期を外国の文化と関わり合いながら生活する得難い体験をしている。しかし、その地域に長年住んでいれば当然のように分かることも、3年程度で帰国する派遣教員や駐在員である保護者にとって住み慣れた土地ではないため、言語の理解はもちろんその地域の社会生活を十分に理解することはなかなか難しいことである。

このように在外施設での地域学習の難しさを感じることもあったが、学習活動に快く協力して下さったドイツ人の方々や受け入れ先との連絡調整、活動当日に通訳をして下さった現地採用教員の方のおかげで、現地理解活動を取り入れた社会科の授業実践ができた。小学3年生の担任として私が取り組んだ実践の一部を紹介する。

2. 地域素材を生かした学習の実践

(1) 小学3年社会科「のうかの仕事」

①ドイツの農家の仕事（フレック農園を例に）

ドイツ人はパンを主食として食べている。そして、ジャガイモもいろいろな料理へと調理され、よく食べられている。フランクフルトの近郊にはたくさんの農家があり、小麦やジャガイモを作っている。ドイツ全体で見ると、小麦の生産量は2280万tと世界で9番目の生産量を誇る。²また、ジャガイモは世界で6番目に多い1180万tを生産している。³国民が1年で食べる量も、日本人の平均23.8kgに比べ、ドイツ人は72.4kgと3倍以上となっている。

見学に行ったフレック農園の畑の広さは、105haあり、小麦だけでなく、ジャガイモやとうもろこしを作っていた。1年間でフレック農園だけでも80000kgものジャガイモが収穫され、小麦は340tも作られている。また、小麦の他にもライ麦も作っていた。日本のパンは小麦が原料のものが多く、ドイツではライ麦もパンの材料の大切な1つである。

フレック農園では、10月に小麦の種をまき、7月から8月に麦を収穫している。麦を作るには、冬や夏の気温や日差しの様子にいつも気をつけなければならないという苦労がある。また、ジャガイモ同様に、水や虫や肥料のことにも気をつけていることや、ドイツの気候は寒いので、小麦や他の穀物も1年に2回収穫することはできないことなど、説明して下さった。

②農家の仕事 事前学習

農園の経営者でもあるフレックさんは、近隣の学校の児童生徒を自分の農園に招待し、農作物について話をしたり、様々な体験をさせたりしているようだ。現地校同様に、日本人小学校も毎年、快く児童を受け入れていただいている。

そして、農園見学へ行く事前学習として、自分達が日頃よく食べている農作物を調べたり、農家の仕事について知りたいことをまとめたりした。その他にも、フレックさんからいただいたプリントをもとに、麦の種類についての事前学習を行った。麦の種類や農作業での単語をドイツ語の授業で扱い、フレックさんや農園で働くドイ

ツ人の方が説明してくださる言葉を少しでも理解できるように取り組んだ。また、プリントにあったドイツ語は、ドイツ語担当の現地採用教員に翻訳してもらい、見学の際、言語面で困らないように配慮した（下の資料参照）。

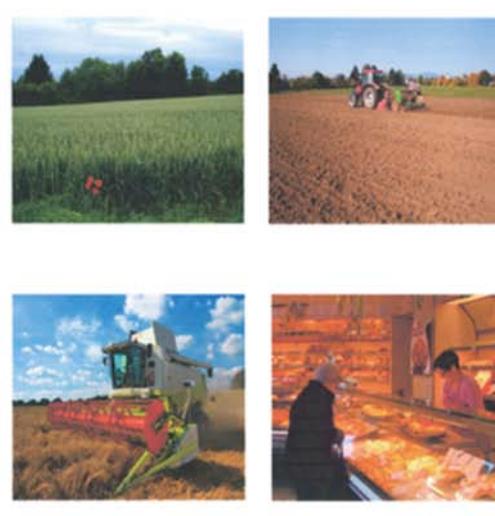
DIE STATIONEN IM ÜBERBLICK

Lies dir die Aufgaben an den Stationen genau durch! Wenn du fertig bist, kreuze die Station auf der rechten Seite an und gehe weiter zur nächsten.

Station 1	Kennenlernen der Weizenpflanze 「小麦」について学ぶようしよう。	<input type="checkbox"/>
Station 2	Erkunde die Geheimnisse einer Weizenähre 「小麦の穂」について学ぶようしよう。	<input type="checkbox"/>
Station 3	Weizensamen selber aussäen 小麦のたねをまいてみよう。	<input type="checkbox"/>
Station 4	Das große Getreidequiz こくうクイズ。	<input type="checkbox"/>
Station 5	Lerne die verschiedenen Getreidepflanzen, Getreidekörner und andere Pflanzen kennen. Ordne daraus hergestellte Nahrungsmittel zu 「こくういのしやういり」について学ぶようしよう。	<input type="checkbox"/>
Station 6	Aus Korn wird Mehl くむからくむまこ。	<input type="checkbox"/>
Station 7	Haferflocken selber herstellen オートむぎのフレークを自分で作ってみよう。	<input type="checkbox"/>
Station 8	Öl selbst herstellen なたねあぶらを自分で作ってみよう。	<input type="checkbox"/>
Station 9	Erkundung des Landwirtschaftlichen Pfades an der Bonifatiusroute ホニファーツィウス ; 農道での探検	<input type="checkbox"/>
Station 10	Der Weg vom Korn zum Brot くむ	<input type="checkbox"/>

STATION 10 10. くむからパンへ
DER WEG VOM KORN ZUM BROT

Ordne die zehn Bilder in der richtigen Reihenfolge –
vom Korn zum Brot. くむのくむからパンになるまでをじゆんじゆんにしよしんをならべましよう。



③農園見学

7月5日（金）に、社会科の授業で校外学習として、フレック農園へ見学に行った。農園では、まず、穀物の種類の説明を聞いた。その後、大きなトラックの荷台にのり、広い農園を一周した。また、自分たちで小麦をひいて小麦粉を作ったり、小麦のフレークを作ったりした。他にも、機械を使って菜種油を作る体験をした。さらに、農園を回る途中には、麦を刈り取るためのコンバインを見せていただき、1人ずつ運転席に座らせていただいた。日本の農家とは比べものにならないくらい大規模農園の仕事の一部を目にすることができた。



農家の方の話を聞く児童たち

ほぼ1日かけての学習だったが、子どもたちは飽きることはなかった。初めて目にするものや体験することの連続で、何度も「すごい！」という声を上げていた。また、事前学習で農家の仕事や農園にあるものの名前をドイツ語で理解できるように準備していたおかげで、フレックさんの説明を聞きながら、彼らなりに教えていただいたことを一生懸命にメモすることができた。

④フレック農園見学を終えて

見学の最後には、事前学習に使ったプリントにあるクイズをしたり、農家の仕事についての質問をさせていただいたりした。また、農園で収穫した小麦を使った奥さんの手作りパンも味わった。



コンバインの迫力に驚く児童たち

見学を終えての感想には、「体けんタイムの時に、ほくが一番たくさんやったのは、オイル作りです。オイルを作るきかいは、ほくたちが何回も回しても、小さなビンに、たったの3本にしかありませんでした。オイルを作

るのって大変だなあとかんじました。スーパーで売っているオイルを作るのためには、たくさんのざいりょうと時間がかかると思いました（原文のまま）」や「初めてこんな大きなトラクターを見ました。運転席に乗ったら、とても高くてびっくりしました。フレックさんが広い畑でもこのトラクターを使うと、かんたんにむぎがしゅうかくできると教えてくれました。すごいなと思いました（原文のまま）」と書いてあった。子どもたちは実際に目にした農園で、作物を育てる大変さや大規模農業を行う上での機械の役割を学び、また、直接説明を聞くことを通して、農家の人のよい物を作り、消費者へ届けたいという願いを肌で感じたようだ。

授業では、見学をもとに教えてもらったことや感じたことを新聞にまとめた。出来上がった新聞は廊下に掲示し、他学年の授業や児童の送迎に来る保護者の方が見ることができるようにし、学んだことを他へ発信する活動へとつなげていった。

3. おわりに

社会科や総合的な学習の時間を通して、私自身もフランクフルト市やヘッセン州、そして、ドイツについて多くのことを学ぶことができた。実践例として紹介した「のうかの仕事」だけでなく、小学3年生の社会科学習では「お店の仕事」で現地のスーパーやパン工場などの施設に見学へ行き、お話を伺ったり自分で体験活動をした。そこでは、毎回ガイドブックや資料からでは分からないような発見が数多くあった。現地理解活動を通じ、教科書や資料だけでなく実際に自分の目で見て、体験して感じることはとても有意義な活動であった。子どもたちのドイツ在住歴に差はあるが、学習を通して、日常生活ではあまり目にできないことや話すことができない方々と知り合い、体験活動や質問させていただき、新たな気づきが多く生まれていった。フランクフルトで暮らしているという事実を大切に、自分の住んでいる地域に愛着をもてるようにこれからも支援していく必要性を感じた。

最後に、在外施設において地域素材を生かした学習活動を実践するにあたって、派遣教員以外の方々の助けがあってこそ意義ある活動が実施できるということも付け加えておきたい。

注

- 1 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 社会編』 p.20 平成20年6月
- 2 FAOSTAT 2011年
- 3 FAOSTAT 2011年